

J.S.バッハ（レーガー編）：ブランデンブルク協奏曲（ピアノ4手版）

《ブランデンブルク協奏曲》は、6つの独立した協奏曲からなる曲集で、第1番が4楽章構成であるほかは、すべて3楽章構成となっている。

《ブランデンブルク協奏曲》という呼称の由来は、1721年にブランデンブルク辺境伯に献呈されたことによる。原題がフランス語で「いくつもの楽器による協奏曲集」となっている通り、6つの協奏曲は各楽器の特性と音色を活かした種々多様な楽器編成を採用している。

狩猟ホルンが華やかさを醸す、編成規模の大きい第1番、トランペットが輝かしい高音を鳴り響かせる第2番、弦楽プラス通奏低音の第3番、2本のリコーダーと独奏ヴァイオリンが絶妙なやり取りを繰り返す第4番、チェンバロが大活躍する第5番、ヴァイオリン抜きの弦楽合奏という異色の編成の第6番、というバラエティに富んだ組み合わせである。

それぞれの成立年代は番号順ではなく、古いものはその原型がワイマール時代にまでさかのぼるとも推測されている。献呈当時、バッハはケーテンの宮廷楽長（1717～23年）を務めていた。この曲集の白眉とも言える第5番は、ケーテン時代の一番最後に完成した。ちょうどバッハが特注のチェンバロを受け取ったあとだったこともあって、精神的な高揚が第1楽章カデンツの長大さにも表れており、チェンバロ協奏曲の前身ともなった先駆的作品とされる。

4手ピアノ版の編曲を行なったマックス・レーガーは、20世紀初頭に活躍したドイツのピアニスト兼オルガニスト、そしてドイツ後期ロマン派に連なる作曲家である。彼は敬愛していたバッハの作品を深く研究し、このブランデンブルク協奏曲以外にも、管弦楽組曲やオルガン作品など多数の編曲を行なった。1904～05年にかけて4手ピアノへと編曲された本作は、これまで上演機会が稀だったが、その理由の一つに、編曲の手法があまりにも理論的で、錯綜する声部が漏れなく4手に振り分けられているため、演奏難度が非常に高かったことが挙げられる。

今回はヴィルトゥオジティーあふれる第5番のみならず、多彩な楽器編成からなる全曲をピアノ一台に塗り替えたものを聴くことができる。レーガーによる名人技の編曲が、原曲の旋律や書法の見事さをどこまで際立たせてくれるのか、ピアノ・デュオのパフォーマンスとともに、興味の尽きないところである。